



NPO PTPL “ともいき” 便り No.54

平成 26 年（2014 年）6 月 21 日発行

■夏至（げし）

（6 月 21 日から 7 月 6 日までの節気）

今年の夏至は 6 月 21 日。梅雨の最中に、「夏」が「至り」ました。この日、太陽は最も高く昇り、昼は一番長く、夜は一番短くなります。

一年・二十四節気の季節の移ろいの中で、「2 至 2 分」という覚え方を勝田理事長から教わりました。冬至と夏至、これが 2 至。春分と秋分で 2 分。「2 至 2 分」は、日本の季節の要かなめの日であることがわかります。日本人の知恵の言葉といえるでしょう。

俳句歳時記（角川書店）の夏至を開いて見ました。例句 4 つから 2 句を眺めます。

- * 夏至今日と思ひつつ書を閉じにけり 虚子（閉じ、の「じ」は「ち」に濁点）
- * 金借りに鉄扉重しや夏至の雨 源蔵

高濱虚子は、そうだったか。きょうはもう夏至なのだ気づいて、なにか感慨をもよおしながら、読んでいる本を静かに閉じた、というのです。なるほど。

源蔵とは角川書店主で俳人としても知られた角川源蔵ですが、降る梅雨の雨の中をお金の工面に出かけて行く。銀行でしょうか、鉄の扉の重たさがひとしおだ、という。資金繰り、悩ましい仕事ですね。角川書店先代の告白。人生を感じます。

一方、こんな句もあります。「梅雨寒の吐息の白さ壁に吸わる」。昭和 23 年ころ肺結核で入院中の、ぼく十七歳の句です。暑い日があるかと思うと寒くて、セーターがほしい日もあるのが梅雨。その日は寒い日で吐く息が白く、やがて病室の白壁に吸われるように消えたのでした。消える息と命、思春期の感傷でした。

天候不順の季節ですが、年々その荒れ方がひどくなり、地球温暖化の防止対策は、もう待った無しの地球社会です。が、国連も各国も意外に呑気。地球の自然の秩序が根底から狂っていることに、市民も企業も行政も国家も、真剣にならないと地球は危ないのではないかと。経済再生どころの話ではないと思いますが。

梅雨どきになると浮かぶ短歌があります。斎藤茂吉の歌です。

五月雨^{さみだれ}は なにに降りくる 梅の実^うは
熟^うみて落つらむ この五月雨に

声に出して読んでみましょう。2～3回繰り返し替えずと、この歌の語感とリズムの絶妙さが、読み手に伝わってきます。「梅の実」と「熟みて」の語呂あわせ、頭の「五月雨」とお尻の「五月雨」の首尾完結の巧み。よくもこんな名歌を歌えたものと、思い出すたびに感に耐えません。

斎藤茂吉は、万葉時代から連綿と伝わってきた日本語の味わいと美しさを、昭和時代にまで受け継いだ、すばらしい歌人だと思います。

この一首。梅雨の最中、しとしとと止むことなく雨がふっている。少し黄色く色づいて熟れた梅の実が「ぽとん！」と、ぬれた地面に落ちてくる。その情景を見ながら茂吉が心に残した情感。しかも、その言葉表現の絶妙さが伝わってきます。こういうデリケートな心情も伝える日本語、なんというありがたい宝だろうと思うのです。

ついでに、とっては失礼ですが、思い浮かぶままに茂吉をもう少し。

山故に笹竹の子を喰いにけり

ははそはの母よははそはの母よ

山形県に育ち大都会を知ることなく逝った母の死に駆けつけたときの茂吉の「死に給う母」という歌の中の一首です。ここでも「ははそはの母」という言葉を重ねています。どれほど母への思いが深かったか。ほかの言葉では言い表わせない思いが伝わってきますね。このときの数首は著名です。

*喉^{のど}赤きつばくらめ二羽^{はり}梁に居て

垂乳根^{たらちね}の母は死にたまふなり

*わが母を焼かねばならぬ火をもてり

仰ぐ空には見るものもなし

漢字とひらがなの日本語だからこそ生まれた短歌や俳句、その深い味わいも一年に二十四節気がある自然風土から生まれた詩なのでしょう。日本語を大切にしたい思いが、年ごとにつよくなっていきます。

朝倉 勇 (NPO PLANT A TREE PLANT LOVE 理事)

■ ともいき・ともうみ雑感彼是

私の「住みたい東京」。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを6年後にひかえ、1,200万人の人々が暮

らす、巨大な過密都市、東京の景観美と都市環境の修復、つまり東京の再生(よりよい状態につくり変える)がひとつの大きなキーワードとなってきました。

東京に住む人たち、そして外国からの訪問者の心を和ませ、癒し、ヒートアイランド現象を少しでも緩和するような東京への再生。

生きているありがたさを実感できる東京での生活。アスファルトとコンクリートとガラスと鉄の人工物に取り囲まれた生活ではなく、自然と人工物が加減よく融和している東京への再生です。

都市再生、都市環境をよくしようと、掛け声ばかりで建物の建て替え、新築ビル群づくりだけの再開発では事足りません。

そのためには、まず、腕のいい職人、造園学、農学の専門家、建築家、デザイナー、発想のよい文化人、政治家などの参加が必要であり、(外国の大都市に住む人々に参加してもらうことも考えられます。)知恵を出し合わなければ東京の再生はなされな
いでしょう。

東京を快適な空間にするための知恵と技術が必要なのです。

空間をただ緑や花で埋め尽くすことではなく、個々の緑と花のさまざまな効力や潜在能力を引き出し、快適な空間を創り出すことが大切なのです。

◆以下は東京の景観美をよくするための私見であり、私が「住みたい東京」です。

先ず、緑を増やすこと。街路樹の徹底的な整備が必要です。そして、緑を植えることができる土地を少しでも多くつくること。緑を植えることができるスペースを企業が責任を持って確保することです。(つまり町のあちこちにポケットパークを造園することです。竹藪のポケットパークも面白いですね。)東京には、コンクリート塀、コンクリートブロック塀、レンガ塀などがたくさんあり、これを生垣に取り換えることにより景観にも風の流れにも良好となります。

街路樹、ポケットパーク、公園などが町の中にグリーンベルトを何本もつくります。

次に、川と水です。東京には川が少なく、あっても川は高速道路の下で死んでいきます。水の流れ、水の流れる音を感じる、太陽の光に照らされたキラキラと光る川は素晴らしいものです。(できれば水質の良い、魚が住める川。)川のほとりの木々、吹く風、葉の揺れる音。われわれに和みを与えてくれるでしょう。

そして最後に、クモの巣がはったような電線が東京の青空を塞いでいます。ロンドンやパリ、ニューヨークのように、電柱、電線の地中化は災害予防面からも、外国人観光誘致の面からもとても大事なことです。

想像してみましょう。緑と花が溢れ、水が流れ、電柱・電線がない東京を!!

それは住民にとっても、観光客にとっても素敵な憩いの町です。(月を眺める人、自然に親しむ人も多くなることでしょう。そして、2020年の東京オリンピックのマラソンでテレビ中継の時、空からこんな東京の姿を見ることができたら……。)

経済成長も大切ですが、それしか大切なものがない国、それ一辺倒の国にはなりたくありませんね。世界の大都市に住む人々から「私も、あの絶勝の地、東京に住んでみたい。」と言われる東京に!!

●「ともいき」「ともうみ」で東京の景観を魅力ある、素敵な町にしましょう。

●上記の考えをイメージして制作した映像があります。ぜひ、ご覧ください。

タイトルは「木を植えよう、愛する仲間をつくろう」

<http://www.tomoiki.tv/kiwoueyou/kiwoueyou700.html>



勝田 祥三 (NPO PLANT A TREE PLANT LOVE 理事長)

■事務局だより

● 「虎ノ門タヒルズ」がオープン。

事務所の近くに都内で2番目の高さを誇る高層複合施設、「虎ノ門ヒルズ」が6月

11日(水)にオープンしました。この建物は民間主導の高層ビル建設とは異なり、東京都施行の市街地再開発事業の中で環状第二号線の整備と一体的に建築した超高層タワーで、官民連携による都市開発の象徴的なプロジェクトです。先日、このタワーにポケットパーク的な空間があるということなので、のぞいてきました。ポケットパークとは思えないほど、とても広いアンジュレーションのある芝生で覆われた空間が多く、来場者に憩いの場を与えています。人工的とはいえ、事務所に近くに、このような空間があることはとてもすてきだと思います。天気の良い日にはちょくちょく利用しようと思っています。

- 「ジャパネスク」のサイトもご覧いただき、そしてご意見、ご感想をお寄せください。お待ちしております。

<http://japanesque.pw/>

- Facebook「ともいきぐらし (<https://www.facebook.com/tomoikigurashi>)」並びに「おらが富士計画 <https://www.facebook.com/oragafuji>」をご覧ください。そしてご意見、ご感想をお寄せください。お待ちしております。

- まだまだ梅雨本番の時季。うっとうしい日が続きそうですが、皆さん、どうぞ、お身体ご自愛ください。

■ お問合わせは

NPO PLANT A TREE PLANT LOVE 事務局 担当：佐藤
〒105-0001 東京都港区虎ノ門 1-2-18 虎ノ門興業ビル7階
電話：03-6205-7503
FAX：03-6205-7504
Email：info@plantatree.gr.jp